

令和4年度事業報告
(令和4年4月1日～令和5年3月31日)

1. バドミントンの普及及び指導

(1) ジュニアに対する普及・指導活動の充実と助成活動を進め、会員の拡大を図ったが、新型コロナウイルス感染症の影響による国内外の各大会が一部中止により、会員数の減少を招いたが、令和4年度については、各加盟団体の推進努力により 295,127 名の会員数を得て回復基調となってきた。会員登録30万人の目標に更なる助成活動を推進する。

(2) 公益財団法人日本バドミントン協会創立75周年記念事業第31回全国小学生バドミントン選手権大会

12月23日から12月27日までの5日間、いしかわ総合スポーツセンターで延542名の指導により、男子の部団体49団体、女子の部団体49団体、6年生以下男子単42名、同複34組、女子単42名、同複34組、5年生以下男子単36名、同複34組、女子単36名、同複34組、4年生以下男子単34名、同複34組、女子単34名、同複34組、実人員632名の参加で開催。優勝者は男子団体愛知県、女子団体愛知県、6年生以下男子単篠原康輔(中萩JBC)、同複殿畑 玲人・岩瀬 剛大組(綾瀬ジュニアBC)、同女子単樫尾 雫玖(大里東ジュニア)、同複眞泉 果央・近藤 愛未組(BELIEVE)、5年生以下男子単串間 太政(UNAID宮崎)、同内藤 遥希・稲川 達士組(川越ジュニア)、同女子単曾根 紬(NP神奈川)、同複烏川 愛加・武石 玲那組(東少年)、4年生以下男子単角倉 蓮太(西尾ジュニア)、同複秋庭 真尋・栗田 遥翔組(加古川JBC)、同女子単阿波 柚子菜(岡垣ジュニア)、同複福田 梨乃・土師 みちる組(JBCふちゅう)で、導入期の少年に正しい競技を習得させるとともに、少年層の普及に成果を収めた。

(3) 第23回ダイハツ全国小学生ABCバドミントン大会

8月12日から8月14日までの3日間、八代トヨオカ地建アリーナ(八代市総合体育館)、東陽スポーツセンターで、役員延713名の指導により、男子Aグループ61(※棄権3)名、同Bグループ53(※棄権1)名、同Cグループ49名、女子Aグループ63名、同Bグループ53(※棄権3)名、同Cグループ49(※棄権2)名、実人員319名の参加で開催。優勝者は男子Aグループ松下 一誠(北北海道)、同Bグループ玉城 春真(愛知県)、同Cグループ松木 琉森(東京都)、女子Aグループ樫尾 雫玖(愛知県)、同Bグループ女子阿波 柚子菜(福岡県)、同Cグループ宮下 蒼夏(愛知県)で、導入期の少年に正しい競技を習得させるとともに、少年層の普及に成果を収めた。

(4) 第38回若葉カップ全国小学生バドミントン大会

7月29日から8月1日までの4日間、長岡京市西山公園体育館で、役員延760名の指導により、男子の部36都道府県48チーム、女子の部39都道府県48チーム、866名の参加で開催予定だったが、新型コロナウイルスの感染急拡大の影響により男子6チーム、女子5チームが棄権した。優勝者は男子の部 西尾ジュニア(愛知県)、女子の部 はりーあつぷ(愛知県)で、新型コロナウイルス感染症対策の徹底により今までの大会より制限が多い中で、日ごろの練習の成果を十分発揮し試合に臨み、体力の増強と健全で豊かなスポーツの育成に効果を挙げ、心身ともに鍛えられ成長を実感することができた。

(5) 第52回全国中学校バドミントン大会

8月19日から8月22日までの4日間青森県武道館(弘前市)で、役員延332名の指導により学校対抗男子24校、女子24校、男子単36名、同複36組、女子単36名、同複36組、実人員447名の参加で開催。優勝者は

学校対抗男子福島県立ふたば未来学園中学校(福島県)、同女子青森山田中学校(青森県)、男子単川野寿真(福島県立ふたば未来学園中学校)、同複川崎航生・石沢太一組(青森県青森山田中学校)、女子単浅野真央(青森県青森山田中学校)、同複米本宙那・山中杏哩組(大阪府四天王寺中学校)で、日本中体連との共催で中学生に正しい技術を習得させることができた。

(6)第23回全日本中学生バドミントン選手権大会

3月24日から3月26日までの3日間、ホワイトリング(長野市真島総合スポーツアリーナ)、長野運動公園総合体育館で、役員336名の指導により、都道府県対抗男女混合団体49チーム、実人員533名の参加で開催。福島県が優勝し、中学生の健全育成に寄与することができた。

(7)第51回全国高等学校選抜バドミントン大会

3月24日から3月28日までの5日間、花巻市総合体育館で、役員延1216名の指導により、学校対抗男子33校、女子34校、実人員504名の参加で開催。優勝者は学校対抗男子 埼玉栄高校(埼玉県)、同女子 柳井商工高校(山口県)、男子単 沖本優大(埼玉栄高校)、同複 沖本優大・角田洸介組(埼玉栄高校)、女子単 宮崎友花(柳井商工高校)、同複 清瀬璃子・平本梨々菜組(青森山田高校)で、それぞれ高校生の交流と技術の習得に大きな成果を収めた。

(8)日本バドミントンジュニアグランプリ

令和4年度より大会休止中

(9)第40回全日本レディースバドミントン選手権大会

7月21日から7月24日までの4日間、都道府県対抗の部は、北海道総合体育センターにて、32都道府県33チーム、実人員357名の参加で開催。優勝者は福岡県。また、クラブ対抗の部は同日、同場所にて、32都道府県45チーム、485名の参加で開催。逗子なぎさ(神奈川県)が優勝し、レディースへの普及と正しい競技の習得に大きな成果を収めた。役員延384名。

(10)第17回全日本レディース(個人戦)バドミントン競技大会

12月9日から12月11日までの3日間、小瀬スポーツ公園体育館他2会場で、ダブルス個人戦で実施し、37都道府県、実人員782名の参加で開催。優勝者は1部勝間香菜恵・岸上紗帆組(京都)、2部Aブロック田中琴裕幸・河村美咲組(山口)、2部Bブロック辻陽子・高島康子組(京都)、2部Cブロック藤田容子・島田三貴子組(香川)、2部Dブロック葛西深雪・高木圭子組(岐阜)、2部Eブロック畑末絵理香・稲田百合組(兵庫)、2部Fブロック竹田由美子・磯山浩美組(大阪)、2部Gブロック千葉昌恵・石原美香子組(東京)、2部Hブロック福田典子・堀江圭子組(栃木)、2部Iブロック上田佳代子・菊池葉子組(東京)でレディースへの普及と発展に成果を収めた。役員延342名。

(11)用器具検査並びに認定

6月25日に令和4年度の追加2回目の検定審査を実施し、ラケット24種(内新規24種)、ネット4種、ウェア118種(内新規113種)、ストリングス2種(内新規2種)、シューズ12種(内新規12種)を認定した。また、10月16日、2月5日に令和5年度の検定審査会を実施し、第1種水鳥シャトル24種、第2種水鳥シャトル9種、合成シャトル1種、ラインテープ3種、ラケット184種(内新規45種)、ネット24種(内新規1種)、ウェア759種(内新規281種)、ストリングス54種(内新規5種)、シューズ81種(内新規27種)を認定した。

(12) 競技規則書及びルール教本発行

競技規則並びに諸規程の周知徹底、各都道府県協会や8連盟が審判講習会・審判員資格検定会等において使用するために、「2022－2023BADMINTON 競技規則(諸規定集)」を発行した。また、3級・準3級公認審判員資格検定会でルールを分かり易く周知徹底させるためのルール教本を、令和4年度は「2022年版3級・準3級公認審判員資格検定会ルール教本(緑本)」を発行した。これにより常に新しい競技規則等の正確な資料を提供し、正しいルールに基づく円滑な試合運営の実施と公認審判員有資格者の増員、資質の向上を図った。

(13) 会員普及

加盟団体と連携し、コロナ禍で減少した会員数の回復に努めた。また、会員登録システムの活用により、電子化された会員証及び審判員手帳等の機能を維持し、都道府県協会の会員登録業務の利便性を図った。

(14) 指導教本発行

コーチ3、コーチ4の養成講習会・更新研修会用公式テキスト(アドバンスコーチ)を令和4年度中に発行予定であったが、新型コロナによる編集作業の遅れにより、令和5年度中ごろ発行となる見込みである。

(15) 広報活動

HPを活用しての迅速かつ正確な情報公開と広報活動及びマスメディアに対して適時な情報、資料等を積極的に提供した。昨年は、新型コロナウイルス感染症対策によりいくつかの大会が中止となりました。12月開催の全日本総合バドミントン選手権(武蔵野の森総合スポーツプラザ・有観客試合)において、バドミントン競技の普及・発展及び愛好者に対し、バードスコアー、フジテレビによる全試合配信を行うことにより会員拡大を図った。

(16) 連盟に対する助成

学生連盟、高体連、中体連、小学生連盟、教職員連盟、レディース連盟、実業団連盟、社会人クラブ連盟の8連盟に対し、助成し、同連盟のより活発な活動を図るべく助成した。

(17) 小・中・高一貫指導

「世界で戦える競技者」育成のため、各都道府県協会に小・中・高の一貫指導体制の構築を推進し、ジュニアの育成・強化を図った。

(18) バドミントン・アーカイブの収集・整理・公開

本会の歴史やバドミントン競技の歴史を残すことにより、本会の存在意義、バドミントンの魅力を多くの人々と共有し、バドミントンの発展に寄与するため、レジェンドのインタビュー動画、更に加盟団体等から寄贈を受けた周年記念誌等を電磁的に記録し、公開した。また、1種大会の大会プログラム及び結果報告についても電磁的に記録し、公開を行った。

(19) バドミントン・レガシーの創出と継承

バドミントン未来創造アカデミーの開講を予定していたが、新型コロナウイルス感染症予防対策のため中止した。

(20) バドミントンフェスタ2022

バドミントンの普及発展に寄与するため、開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症予防対策の影響により中止とした。

(21) バドミントンファンクラブ

日本代表選手のファンクラブ会員を募集し、日本バドミントン界の普及・発展及びバドミントンファン拡大を図るべく取組を行ったが、新型コロナウイルス感染症の影響で、会員増大には繋がらなかった。

(22) バドミントンフォーラム

加盟団体と意思疎通を図り、協力関係、連携の強化を図るため開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症予防対策の影響により中止とした。

(23) 75周年記念事業

令和3年(2021年)11月2日に本会の創立75周年を迎えた。記念啓発ちらし、動画、パネルを作成し、ダイハツヨネックスジャパンオープンや全日本社会人選手権大会等において配付、展示を行った。75周年誌については、レジェンド、現役選手等40名の協力によるインタビューを実施し、これらを中心に編集した協会の歴史(本編)、日本のバドミントンの黎明期を題材とした別冊、更に別冊の一部を英訳した翻訳本の3種類を作成し、関係者に配付を行った。この75周年誌及びインタビュー動画については、本会ホームページに掲載し、閲覧できるようにした。

(24) 新型コロナウイルス感染症拡大防止事業

新型コロナウイルス感染拡大予防として本会が策定した「新型コロナウイルス感染症対策に伴うバドミントン活動ガイドライン」及び「新型コロナウイルス感染症対策に伴うバドミントン活動ガイドライン3章バドミントン競技大会・イベント実施にあたって」に沿って都道府県協会が第1種大会等を運営できるように助成を行った。また、このことを通じて都道府県協会の安定運営に向けた支援を行った。

2. バドミントンに関する審判員及び指導員の養成及び資格の認定

(1) 公認レフェリー資格者の本会第1種大会等への派遣と資質向上

公認A級・B級レフェリー有資格者を令和4年度実施予定の全ての第1種年次大会(26大会)及びヨネックス杯国際親善レディースバドミントン大会2022にレフェリー及びデピュティレフェリーとして派遣し、大会の運営全般の統一性と公正化を図った。

また、国内レフェリー認定委員制度(兼国内レフェリーインストラクター制度)を活用し、公認レフェリー資格者の資質の向上のために、レフェリーインストラクターを第1種年次大会(13大会)に派遣し、レフェリーの資質向上を図った。

(2) 公認A級、B級レフェリー資格検定会

公認B級レフェリーの育成と定数(全都道府県各1名、9地区各1名、8連盟各1名)の維持を図るために、公認B級レフェリー資格検定会(追試)を5月に実施し、4名が合格した。また、公認A級レフェリー資格検定会(学科)を1月に開催し、3名が学科試験合格、令和5年度に実技検定を行う。

(3) 公認レフェリー研修会

本会第1種大会における競技規則の統一と大会の公正さを図り、大会全般にわたる運営及び審判団の指導、管理のために、競技諸規程の改定箇所を確認、諸規程に対するルール解釈の統一と資質の向上を図るために研修会を2月に実施した。

(4) 資格審査認定委員資格更新講習会並びに資格審査認定委員検定会

資格審査認定委員資格更新講習会並びに資格審査認定委員検定会を5月に名古屋、東京の2会場にて開催し、更新者220名、検定会合格者11名を公認した。また、資格審査認定委員資格更新講習会(追加)並びに資格審査認定委員検定会(追試)を12月に実施し、更新者7名、検定会合格者7名を公認し、総計245名を令和5年度から令和7年度の資格審査認定委員とした。

(5) 公認審判員資格検定会

正しい競技規則の習得と審判技術の向上による円滑な大会運営を図るため公認審判員資格検定会を開催し、本会公認審判員の育成を図った。1級審判員検定会は本会が主催し、2級、3級、準3級審判員資格検定会は、地区及び都道府県、8連盟が主催し開催された。検定会においては、本会公認審判員資格審査認定委員が担当した。公認審判員資格登録規程による学科試験、実技試験を実施し、合格者を各級公認審判員に認定し、各地で実施される大会において正義と公正に基づく円滑な競技会運営に寄与した。

(6) 公認審判員資格認定登録

令和4年度公認審判員資格登録規程に定める審判員資格検定に合格した者は、1級 36名、2級 86名、3級 4,316名、準3級 9,924名、準3級から3級への移行者は 774名で、それぞれ資格登録が完了した。また同規程により、1級 220名、2級 422名、3級 8,989名の有資格者が資格を更新し、1級 10名、2級 18名、3級 624名が、再取得をした。有資格者総数は、64,994名、1級 1,122名、2級 1,373名、3級 40,884名、準3級 21,615名となった。

(7) 国際審判員・国際線審の研修及び活動

国際審判員資格既得者の研修・活動として、BWF、Badminton Asia の指名により国際レフェリー、国際審判員、国際線審を国際大会へ派遣した。また、BWF、Badminton Asia の主催のWEBによるレフェリー・審判員セミナーが開催され、国内の多くの国際審判員や受験候補生が受講した。

(8) 国際審判員、国際線審の派遣、受入および国際審判員相互派遣事業(イクスチェンジプログラム)の推進、国際審判員の国内開催国際大会への派遣

新型コロナウイルス感染症対策の影響のため、国際審判員相互派遣事業(イクスチェンジプログラム)は中止とした。また国際審判員を国内開催の国際大会3大会に派遣。国外の大会にも数大会派遣した。

(9) 公認スポーツ指導者養成講習会

今年度は、公認コーチ3養成講習会(前期静岡市、後期高松市)を開催し、38名が受講した。各都道府県バドミントン協会が各々のスポーツ(体育)協会と共催で実施する公認スポーツ指導者養成講習会は、公認コーチ1は、北海道、青森県、山形県、福島県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、長野県、静岡県、愛知県、三重県、岐阜県、京都府、兵庫県、鳥取県、福岡県、大分県の19都道府県で開催された。公認コーチ2は、北海道、神奈川県の2道県で開催された。

(10) 公認スポーツ指導者全国担当者会議

公認スポーツ指導者養成の必要性および公認スポーツ指導者養成制度を周知し、全ての都道府県協会において養成講習会や更新研修会が開催されることを目指すことを目的とした担当者会議をオンラインにて開催し、41都道府県の担当者59名が参加した。

(11) 公認スポーツ指導者講師競技別全国研修会

群馬県桐生市「美喜仁文化会館」を会場として2日間で実施。18県から25名のコーチ・エデュケーター(継続・新規)が参加し、講義、実技研修を行った。

(12) 公認スポーツ指導者の資格更新

指導者資格認定制度に登録された各スポーツ指導者の登録更新のために、4年間に1回受講が義務付けられているコーチ3、コーチ4更新研修会は、今年度は3回開催され104名の受講者が参加した。また、39都道府県協会(延べ55回)で、公認コーチ1・コーチ2資格更新ための更新研修会が実施され、指導者としての資質の向上を図った(内3回はレポートによる代替措置)。なお、公認コーチ3、コーチ4の更新研修会受講者及び各都道府県バドミントン協会から報告のあった公認コーチ1、コーチ2の更新研修会受講者を、公益財団法人日本スポーツ協会へ報告した。

(13) 全国巡回バドミントン講習会

昨年度は多くの会場が中止となったが、令和4年度は9会場(茨城県、福井県、高知県、三重県、宮崎県、和歌山県、山口県、群馬県、沖縄県)すべて実施した。

3. 公益財団法人日本スポーツ協会、世界バドミントン連盟(BWF)及び Badminton Asia への加盟と国際貢献

(1) 公益財団法人日本スポーツ協会等への代表者派遣

公益財団法人日本スポーツ協会、JOCへ代表者を派遣するとともにその事業に対し、協調、展開し、バドミントン競技の発展を図った。

(2) 世界バドミントン連盟(BWF)総会等への代表者の派遣

5月26日マレーシアクアラルンプールでBWF総会があり代表者を派遣し、国際スポーツ振興及び世界バドミントン競技の発展を図った。

(3) Badminton Asia 総会等への代表者派遣

4月29日アラブ首長国連合ドバイにてBadminton Asiaの総会があり代表者を派遣した。又同会議には国際部4名がオンラインで会議に参加しアジアスポーツ振興及びアジアバドミントン競技の発展を図った。

(4) 国際貢献

バドミントン発展途上国(メキシコ、ブラジル、アゼルバイジャン)に物品支援(中古ラケット、シャトル、ウェア、シューズ等)を行い、本会が国際貢献を通じて世界のバドミントン界の普及発展に寄与した。

4. バドミントンに関する国内競技会の開催

(1) 第15回全国社会人クラブバドミントン選手権大会(個人戦)

6月17日から6月19日までの3日間、高岡市竹平記念体育館他2会場で、男子単246名、同複223組、女子単29名、同複93組、混合複195組、実人員967名の参加で開催。優勝者は、男子単一般 男全 圭人(神奈川)、30 濱中 裕太(愛媛)、35 古川 太一(富山)、40 杉 薫(福島)、45 藤本 ホセマリ(東京)、50 山本 潤(富山)、55 東 太朗(三重)、60 小池 博幸(東京)、65 土井 吉光(三重)、70 青山信幸(愛知)、75 山路 栄三郎(兵庫)、同複一般 藤本 ホセマリ・福井 剛士組(東京)、30 南 祐太・山口 夏樹組(福井)、35 谷川 俊昭・別森 英司組(富山)、40 赤川 誠・水島 建一組(千葉)、45 磯貝 謙太郎・花井 謙吉組(愛知)、50 宮谷 義浩・杉原 秀俊組(石川)、55 神代 和久・櫛 敏明組(富山)、60 水口 錦次・藤田 洋一組(富山)、65 福永 一郎・小西 秀政組(兵庫)、70 鷺岡 雅・坂本 光雄組(富山)、75 西沖 晃・吉田 寛組(千葉)、女子単一般 南部 一伽(兵庫)、35 地神 加奈子(兵庫)、40 真田 範子(愛知)、45 葛西 深雪(岐阜)、55 田辺 貴恵(福井)、同複一般野村 このみ・南部 一伽組(兵庫)、30 矢木 悠好・中埜 麻央組(富山)、35 山田 潤子・山田 青子組(富山)、40 小坂井 明子・竹内 真由子組(三重)、45 大西 陽子・磯元 琴美 組(兵庫)、50 山崎 美智代・山本 祥子組(富山)、55 小林 洋子・田辺 貴恵組(福井)、混合複一般片山 俊介・三浦折莉組(富山)、合算60西川 夏樹・山本美由紀組(三重)、合算 70 熊倉 佑・川原 あず沙組(神奈川)、合算 80 岡田 淳・草薙 美幸組(大阪)、合算 90 佐々木 卓・佐々木 尚子組(神奈川)、合算 100 高橋和彦・大平 郁子組(埼玉)、合算 110 神代 和久・越田 真佐美組(富山)、合算 120 櫛 敏明・今泉静子組(富山)、合算 130 齋藤 敏和・三ツ石 るみ子組(愛知)、競技役員延310名。

(2) 第72回全日本実業団バドミントン選手権大会

6月15日から6月19日までの5日間、丸善インテックアリーナ大阪(大阪府中央体育館)他1会場で、男子団体148団体、女子団体32団体、実人員2100名の参加で開催。優勝者は男子団体 BIPROGY(東京)、女子団体ヨネックス(東京)、競技役員延 800名。

(3) 第73回全国高等学校バドミントン選手権大会

令和4年7月23日から7月28日までの6日間、日本フネン市民プラザ他3会場で、男子団体50団体、女子団体50団体、男子単98名、同複98組、女子単98名、同複98組、実人員1000名の参加で開催。優勝者は男子団体 瓊浦高校(長崎県)、女子団体 柳井商工高校(山口県)、男子単 齋藤駿(ふたば未来学園高校)、同複 大田隼也・佐々木大樹組(高岡第一高校)、女子単 吉川天乃(倉敷中央高校)、同複 石川心菜・清瀬璃子組(青森山田高校)、競技役員延 1100 名。

(4) 第61回全日本教職員バドミントン選手権大会

8月12日から8月16日までの5日間、愛媛県松山市愛媛県武道館他1会場で、男子団体17団体、女子団体9団体、男子成壮年団体10団体、女子成壮年団体5団体、ハイパーエイジ男子団体11団体、一般男子単78名、同複54組、一般女子単20名、同複27組、30才以上男子単53名、同複25組、30才以上女子単7名、同複7組、40才以上男子単33名、同複25組、40才以上女子単4名、同複6組、50才以上男子単49名、同複28組、50才以上女子単6名、同複10組、60才以上男子単23名、同複8組、65才以上男子単15名、同複8組、70才以上男子単16名、同複9組、55才以上女子単12名、同複6組の参加で開催。優勝者は男子団体栃木県、女子団体石川県、男子成壮年団体千葉県、女子成壮年団体東京都、一般男子単内藤浩司(神奈川)、同複甲谷 光・内藤浩司組(神奈川)、一般女子単有馬弥優(鹿児島)、同複川原裕美子・有馬弥優組(鹿児島)、30才以上男子単藤野和樹(千葉)、同複渡辺 成・矢野凜平組(北海道)、30才以上女子単川原裕美子(鹿児

島)、同複長谷川加奈・内 未里組(石川)、40才以上男子単源口哲史(愛知)、同複高野純平・安川拓穂組(北海道)、40才以上女子単河村美佳(大阪)、同複伊木文枝・永春玲子組(東京)、50才以上男子単秋山啓太(愛媛)、同複後藤智彦・川島康行組(千葉)、50才以上女子単橋本仁美(香川)、同複木下八枝子・坂崎美奈子組(熊本)、60才以上男子単江藤正治(熊本)、同複高岡桂・葛藤昌彦組(福井)、65才以上男子単湯海鵬(愛知)、同複山本正人・三村俊彦組(鳥取)、70才以上男子単松本克芳(山口)、同複松本克芳・福永正一組(山口)、55才女子単宮田真由美(岩手)同複早田彰子・前田美恵子(熊本) 競技役員延820名。

(5)第24回全国高等学校定時制通信制バドミントン大会

8月16日から19日までの4日間、神奈川県小田原市総合文化体育館、通称小田原アリーナで、全国46都道府県から527名の参加申込みがあったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、参加辞退が相次ぎ、最終的には、男子団体45団体、女子団体43団体、男子単97名、女子単93名、実人員495名の参加で開催。都道府県対抗の団体戦優勝者は男子団体・女子団体ともに神奈川県 A、男子単の優勝者は二年連続で二神侑雅(愛媛県)、女子単の優勝者は田中揺奈(岡山県)、競技役員延209名。

(6)第10回全日本学生バドミントンミックスダブルス選手権大会

8月13日から8月14日までの両日、名古屋市守山スポーツセンターで、実人員128名の参加で開催。優勝者は小山翔悟・宮澤里組(法政大学)、競技役員延40名。

(7)第46回全日本高等専門学校バドミントン選手権大会

9月3日・4日両日、丸亀市民体育館で、男子団体12校、女子団体10校、男子単16名、同複16組、女子単16名、同複16組、実人員198名の参加で開催。優勝者は男子団体 北九州高専、女子団体 福井高専、男子単 堀井優純稀(石川高専)、同複 堀井優純稀・大瀬栄和組(石川高専)、女子単 阿比留優花(鈴鹿高専)、同複 伊藤茉耶・及川歩組(徳山高専)、競技役員延41名。

(8)第65回全日本社会人バドミントン選手権大会

9月3日から9月7日までの6日間、一宮市総合体育館で、男子単378名、同複284組、女子単99名、同複125組、同混合複156組、実人員1607名の参加で開催。優勝者は男子単大林拓真(富山)、同複井上拓斗・三橋健也組(東京)、女子単高橋明日香(東京)、同複櫻本絢子・宮浦玲奈組(東京)、混合複霜上雄一・加藤佑奈組(神奈川・熊本)、競技役員延545名。

(9)日本マスターズ2022 岩手大会バドミントン競技

公益財団法人日本体育協会等との共催事業で、9月23日から9月25日までの3日間、北上総合体育館会場で、男子21都道府県、女子16都道府県でのリーグ戦を勝ち抜いたチームによるトーナメント戦で実施。実人員259名の参加で開催。優勝者は男子東京都、女子東京都、競技役員延240名。

(10)第41回全日本ジュニアバドミントン選手権大会

台風の直撃により大会日程を1日短縮し、9月16日から9月18日までの3日間、北九州市立総合体育館他1会場で、ジュニアの部男子単78名、同複53組、女子単75名、同複52組、ジュニア新人の部男子単112名、同女子単112名、実人員888名の参加で開催。優勝者は男子単谷岡大后(福島県)、同複角田洸介・沖本優大組(埼玉県)、女子単遠藤美羽(栃木県)、宮崎友花(山口県)両者優勝、同複須藤海妃・山北奈緒組(福島県)、新人男子単増田遥(福島県)、同女子単阿波芽衣咲(山口県)、競技役員延479名。

(11) 第77回国民体育大会バドミントン競技会

公益財団法人日本体育協会等との共催事業で、10月7日から10月10日までの4日間、栃木県立県北体育館で、成年男子47団体、成年女子16団体、少年男子16団体、少年女子32団体、実人員444名の参加で開催。優勝チームは、は成年男子の部 富山県、成年女子の部 岐阜県、少年男子の部 福島県、少年女子の部 青森県、競技役員延746名。

(12) 第73回全日本学生バドミントン選手権大会

10月14日から10月20日までの7日間、小瀬スポーツ公園体育館体育館他1会場で、男子団体32団体、女子団体32団体、男子単97名、同複98組、女子単96名、同複96組、実人員454名の参加で開催。優勝者は男子団体龍谷大学(京都府)、女子団体系法政大学(東京都)、男子単宮下玲(明治大学)、同複武井優太・遠藤彩斗組(明治大学)、女子単上杉杏(明治大学)、同複植村理央・佐藤灯組(龍谷大学)、競技役員延33名。

(13) バドミントンS/Jリーグ2022

令和4年11月5日から令和5年2月12日までの13日間、由利本荘総合防災公園ナイスアリーナ他20会場で、男子12チーム、女子12チーム、実人員463名の参加で開催。

優勝者は男子トナミ運輸(富山県)、女子再春館製薬所(熊本県)、競技役員延3,000名。

(14) バドミントンS/JリーグⅡ2022

11月18日から11月20日までの3日間、北海道苫小牧市 苫小牧市総合体育館で、男子6チーム、女子6チーム、実人員208名で開催。優勝は男子 トリックイーパングラス(大阪府)、女子 PLENTY GLOBAL LINX(大阪府)、競技役員延600名。

(15) 第39回全日本シニアバドミントン選手権大会

11月18日から11月21日までの4日間、高松市総合体育館他11会場で、30才以上男子単103名、同複89組、30才以上女子単10名、同複32組、30才以上混合複51組、35才以上男子単105名、同複80組、35才以上女子単29名、同複41組、35才以上混合複58組、40才以上男子単113名、同複103組、40才以上女子単23名、同複52組、40才以上混合複69組、45才以上男子単130名、同複105組、45才以上女子単53名、同複84組、45才以上混合複80組、50才以上男子単119名、同複104組、50才以上女子単46名、同複89組、50才以上混合複109組、55才以上男子単93名、同複81組、55才以上女子単46名、同複86組、55才以上混合複84組、60才以上男子単95名、同複94組、60才以上女子単41名、同複82組、60才以上混合複88組、65才以上男子単81名、同複73組、65才以上女子単33名、同複50組、65才以上混合複53組、70才以上男子単73名、同複61組、70才以上女子単20名、同複25組、70才以上混合複40組、75才以上男子単38名、同複24組、75才以上女子単9名、同複16組、75才以上混合複18組、80才以上男子単14名、同複14組、80才以上女子単7名、同複7組、80才以上混合複10組、延べ5,385名の参加で開催。30才以上男子単濱中 裕太(愛媛)、同複小池 直樹・伊東 克範組(東京・石川)、30才以上女子単武田 華澄(香川)、同複野村 このみ・松村 咲希組(兵庫・香川)、30才以上混合複伊東 克範・皆川 友依組(石川・千葉)、35才以上男子単毛利 正和(新潟)、同複本間 裕樹・毛利 正和組(新潟)、35才以上女子単矢田部 真奈(京都)、同複益子 友美・吉川 美穂組(茨城・福岡)、35才以上混合複小林 徹太郎・金子 ゆかり組(北海道・東京)、40才以上男子単花本 大地(鳥取)、同複藤本 ホセマリ・福井 剛士組(東京)、40才以上女子単御前 美希(大阪)、同複鈴木 由希子・奥村 亜紀代組(石川)、40才以上混合複鈴木 利之・石田 麻依組(神奈川・東京)、45才以上男子単藤本 ホセマリ(東京)、同複磯貝 謙太郎・花井 謙吉組(愛知)、45才以上女子単立野 美幸(岡山)、同複石岡 佳世子・中嶋 愛美組(群馬)、45才以上混合複山下 大介・池尻 昭子組(佐賀)。

福岡)、50才以上男子単町田 文彦(東京)、同複町田 文彦・岡田 耕作組(東京・愛知)、50才以上女子単横手 智江美(岩手)、同複木下 八枝子・桑田 和加子組(熊本)、50才以上混合複千田 実・今井 早由里組(埼玉・東京)、55才以上男子単佐藤 浩一(三重)、同複新井 光寿・橋場 孝啓組(北海道)、55才以上女子単櫛山 久美子(北海道)、同複櫛山 久美子・佐藤 律子組(北海道・青森)、55才以上混合複日下 拓郎・日下 光子組(愛媛)、60才以上男子単川路 和利(鹿児島)、同複末坂 進・神代 和久組(富山)、60才以上女子単酒井 成美(石川)、同複村田 直子・平川 はるみ組(埼玉・千葉)、60才以上混合複神代 和久・今津 裕美組(富山・埼玉)、65才以上男子単管 敏明(長崎)、同複弓削 義雄・中村 一弘組(大阪・和歌山)、65才以上女子単太田 清子(静岡)、同複米澤 千江美・伊嶋 恵子組(千葉)、65才以上混合複落合 久夫・米澤 千江美組(東京・千葉)、70才以上男子単青山 伸幸(愛知)、同複青山 伸幸・河原 賢治組(愛知・三重)、70才以上女子単澄川 稔子(兵庫)、同複真鍋 絹子・河野 昌子組(千葉)、70才以上混合複阿佐野 康・田倉 テイ子組(東京)、75才以上男子単木村 都優司(神奈川)、同複後藤 誠・古橋 政紀組(宮城)、75才以上女子単金子 澄子(神奈川)、同複土庵 清子・石井 伸子組(奈良・山口)、75才以上混合複吉田 寛・阿山 博美組(千葉)、80才以上男子単黒崎 二男(神奈川)、同複小川 昌之・小山 包博組(神奈川)、80才以上女子単西田 ヨシ江(神奈川)、同複近藤 明子・道家 幸組(神奈川・愛知)、80才以上混合複荒川 元四郎・一木 房枝組(宮崎・福岡)、競技役員延1,500名。

初の複数県開催となったが、混乱なく無事終了することができた。

(16)第76回全日本総合バドミントン選手権大会

12月25日から12月30日までの6日間、武蔵野の森 総合スポーツプラザで男子単32名、同複32組、女子単32名、同複32組、混合複32組、実人員320名の参加で開催。優勝者は男子単桃田賢斗(NTT 東日本)、同複保木卓朗・小林優吾組(トナミ運輸)、女子単山口茜(再春館製菓所)、同複福島由紀・廣田彩花組(丸杉)、混合複金子祐樹・松友美佐紀組(BIPROGY)、競技役員延1014名。

(17)第23回全国社会人クラブ対抗バドミントン選手権大会

2月17日から2月19日までの3日間、向日市民体育館他2会場で、一般男子団体戦39チーム、一般女子団体戦16チーム、一般混合団体戦7チーム、年代別男子団体戦3種別18チーム、年代別女子団体戦2種別8チーム、年代別混合団体戦3種別25チーム、総チーム数113チーム751名の参加で開催。優勝チームは、一般男子団体戦 T.O.Wiver(東京)、一般女子団体戦 SCRATCH(大阪)、一般混合団体戦 平城クラブ(奈良)、成年男子団体戦 福島県選抜(福島)、壮年男子団体戦A 大阪府選抜(大阪)、壮年男子団体戦B 京都府選抜(京都)、成年女子団体戦 MAKc(奈良)、壮年女子団体戦 奈良県選抜(奈良)、年代別混合団体戦A たまたん(愛媛)、年代別混合団体戦B 高松クラブ(石川)、年代別混合団体戦C 京都府選抜(京都)、社会人への普及と正しい競技の習得に大きな成果を収めた。役員延100名。

5. バドミントンに関する国際競技会

(1)大阪インターナショナルチャレンジ2022

4月6日から4月10日までの5日間、堺市立大浜体育館で開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大のため中止とした。

(2)ヨネックス秋田マスタース2022

令和4年7月26日から7月31日までの6日間、秋田県秋田市で開催を予定していたが、新型コロナ

ナウウイルス感染症拡大のため中止とした。

(3) ダイハツヨネックスオープンジャパン2022

8月30日から9月4日までの6日間、丸善インテックアリーナ大阪で男子単32名、同複64組、女子単32名、同複64組、混合複64組、実人員241名(日本選手28名、外国選手213名)の参加で開催。優勝者は男子単 Kenta Nishimoto (Japan)、同複 Liang Wei Keng・Wang Chang 組 (China)、女子単 Akane Yamaguchi (Japan)、同複 Jeong Na Eun・Kim Hye Jeong 組 (Korea)、同混合複 Dechapol Puavaranukroh・Sapsiree Taerattanachal 組 (Thailand)、競技役員延914名。

(4) ヨネックス杯国際親善レディースバドミントン大会2022

10月20日から10月23日までの4日間、エディオンアリーナ大阪他3会場で、香港より1チームを迎え、トーナメント戦で実施し、実人員1,204名(日本選手1,196名・外国選手8名)の参加で開催。優勝者はAゾーン 大阪バドミントンカレッジ(大阪府)、Bゾーン OSAKA(大阪府)、Cゾーン KAU CHUN BC(香港)、Dゾーン 東大阪 M.B.C.A(大阪府)、Eゾーン 沙羅クラブ(奈良県)、Fゾーン あい&あい C(兵庫県)、Gゾーン ふくみみ(福岡県)、Hゾーン オールド(大阪府)、Jゾーン きらり東京(東京都)、Kゾーン フラワーズ(東京都)が優勝し、国際親善への普及と発展に成果を収めた。競技役員延634名。

(5) 日韓高校生交流競技会

令和4年度の日韓高校生交流競技会は、新型コロナウイルス感染症予防対策の影響により中止となった。

6. バドミントンに関する国際大会への代表者の選考及び派遣

(1) トマス杯・ユーパー杯

令和4年5月8日から5月15日までの8日間、タイ/バンコク市へ団長歸山好和他役員10名、選手男子12名、女子12名を派遣。成績は男子トマス杯準決勝でインドネシアに敗れ3位、女子ユーパー杯準決勝で韓国に敗れ3位。

(2) スティルマン杯

アジア地区予選会となるアジア混合団体選手権2023に令和5年2月12日から20日までドバイ市へ監督朴柱奉他役員10名、選手男子8名、女子8名を派遣。成績は準々決勝でタイに破れベスト8。

(3) 世界選手権

令和4年8月22日から8月28日までの7日間、東京都/渋谷区へ監督朴柱奉他役員10名、選手男子15名、女子13名を派遣。成績は女子単山口茜優勝、混合複渡辺勇大・東野有紗組準優勝、女子複永原和可那・松本麻佑組3位。

(4) FISU ワールドユニバーシティゲームズ

令和4年6月30日から7月5日まで中国/成都市へ派遣を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により令和5年に延期。

(5) 世界ジュニア選手権大会

令和4年10月17日から10月30日までの14日間、スペイン/サンタンデル市へ団長毛利達彦他役員5名、選手男子6名、女子10名を派遣。成績は女子単宮崎友花優勝、女子複木山琉聖・室屋泰乃組3位、石川心菜・清瀬璃子組3位。

(6) 日韓ナショナル交流競技会

令和4年11月7日から11日までの5日間、富山県/高岡市へ団長歸山好和他役員7名、選手男子10名、女子10名を派遣。韓国団長 KIM TAEKGYU 他役員7名選手男子11名、女子8名を迎えて開催された。成績は男子日本3-7韓国、女子日本2-8韓国。

(7) ワールドツアーファイナルズ2022

令和4年12月7日から12月11日までの5日間、タイ/バンコク市へ監督朴柱奉他役員5名、選手男子3名、女子1名を派遣。成績は女子単山口茜優勝、男子単奈良岡功大3位。

(8) 日・韓・中ジュニア交流競技会

令和4年度日・韓・中ジュニア交流競技会は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止となった。

7. バドミントンの競技力の向上

(1) スポーツ医科学研究

公益財団法人日本スポーツ協会、独立行政法人日本スポーツ振興センター及び選手強化本部の各部と連携し、バドミントン競技の特性を研究しながら、トレーニング技術や目標を達成するためのメカニズムを明確にしていくとともに、スポーツ医科学のサポートスタッフの養成を促進し、併せて資質とレベルの向上を図り、競技力向上と強化体制を図った。

(2) アンチドーピング対策

公益財団法人日本アンチドーピング機構(JADA)との協力により、「日本ドーピング防止規程」によるドーピング検査を実施し、アンチドーピング対策を実施した。また、ナショナルA代表はもとより、ジュニア選手へのアンチドーピング・アウトリーチ活動を積極的に進めた。

(3) 選手強化

全日本総合選手権大会の成績を中心に各種大会や日本ランキング等を参考に2024年パリオリンピック対策プロジェクトと位置づけ、ナショナルチームA代表・B代表を男女別に日本代表選手として編成し、国内合宿・海外遠征等により強化を図り、オリンピックでのメダル獲得を目指し進めてきた。競技者育成の一貫指導システムを中心としてジュニア選手の競技力向上を図るために、カテゴリーをU-19(高校生)・U-16(中学生)・U-13(小学生)に分けて強化を継続的に実施し、海外派遣も成果を上げることが出来た。また今後についても、オリンピック、世界選手権大会等に備え次世代の有望新人を発掘に努め、国内外合宿において育成強化を図り、国際大会(世界ジュニア)等に派遣、次回大会でもメダル獲得を目指す。

8. 組織運営

(1) ガバナンスコードの推進

スポーツ庁において策定された「スポーツ・インテグリティの確保に向けたアクションプラン」において、スポーツ基本法第 5 条第 2 項に規定する、スポーツ団体における自ら遵守すべき基準の作成等に資するよう、適切な組織運営を行う上での原則・規範として、スポーツ団体ガバナンスコードが策定された。本会は、ガバナンスコードの遵守状況について、具体的かつ合理的な自己説明を行い、これを公表した。更に、積極的に推進すべくプロジェクトを組織し、理事会組織改革等を行った。

(2) マーケティング及びバドミントンS/Jリーグの改革

中・長期的視野に立った日本バドミントン協会の永続的な健全発展を目標に世界トップレベルの代表選手を擁するまでになったステージをチャンスと捉え、今、マーケティング施策をメインにバドミントンS/Jリーグ改革も同時に進め、日本バドミントン界を国民から広く支持される真のスポーツとして成長・発展を目指した。次なる世代人材育成に務め、健全な財政基盤を強固なものに構築することが必須であり最重要課題としての取り組みを継続中である。